

報告

2017 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

赤池雅史 川野卓二 宮田政徳 吉田 博 新原将義 上田勇仁 上岡麻衣子
徳島大学総合教育センター

要約：全学 FD 推進プログラムは 2002 年度から開始され、FD の体系化、組織化、日常化等を推進してきた。2017 年度は、例年開催している、「授業設計ワークショップ」、「授業参観・授業研究会」、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」、「大学教育カンファレンス in 徳島」の他に、大学教育再生加速プログラムに関連する「SIH 道場担当者 FD」や学内でのアクティブ・ラーニング推進を目的とした、「スマートフォンを活用した授業改善ワークショップ」を実施した。また、学生や教員が、各学部が提供しているカリキュラム全体を容易に俯瞰できるためのツールとして、カリキュラムマップへのナンバリング併記の作業を進めている。各プログラムについて概要を記載し、アンケート結果等から成果と今後の課題について考察する。

(キーワード：ナンバリング、カリキュラムマップ、大学教育再生加速プログラム、教育力開発コース)

2017 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Masashi AKAIKE Takuji KAWANO Masanori MIYATA Hiroshi YOSHIDA
Masayoshi SHINHARA Hayato Ueda Maiko KAMIOKA
Center of University Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University's FD promotion programs started in 2002. They promote the systematization, organization and routinization of faculty development activities. In 2017, in addition to the regular faculty development programs, which include the Course Design Workshop, Classroom Observation and Discussion Meeting, the Teaching Portfolio Workshop and the University Education Conference, we conducted a FD seminar relating to the Ministry of Education's Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP) for the teachers who teach in SIH Dojo classes, known as Introduction to Active Learning for First Year Students. To promote active learning, we also conducted another seminar called Teaching Improvement Workshop using Smartphones in the class. Moreover, we are working in progress to add discipline numbering to the curriculum map for the teachers and students to provide an overview of the whole curriculum provided by each department. We provide outlines of the respective programs and discuss the issues raised in the responses to the questionnaire.

(Key words: Discipline Numbering, Curriculum Map, Acceleration Program for University Education, Educational Development Course)

1. はじめに

近年、予測不能な未来を切り開いていく人材の育成のために、大学教育の質的転換が求められている。これらを背景に、教育の質保証を実現するために、本学のFDは個々の教員から、教育プログラムならびに組織に至るすべてのレベルにおいて、教育改善の取組に貢献できるものである必要がある。

このような観点から、2017年度全学FD推進プログラムにおいては、専門分野・カリキュラム体系の観点から教育改革の推進とその効果検証を進め、教員の職能開発の観点から大学教育再生加速プログラムの事業と連携してアクティブ・ラーニングを推進することを基本方針とした。具体的には、

大学執行部及び、学部等への提案や連携を行いながら教育改革を進めるために、教育改革を推進するマクロレベルのFDを追加し、1) 教育改革FD、2) 教育の質保証FD、3) 教育力開発FD、4) 総括的なFDの4つの観点からFDを実施した。これらによって、学び合いの場（機会）を提供することにより、各学部教員と総合教育センター教員が連携して、更なる教育の質向上と相互に高め合う文化を形成することを目指した。

以下、今年度の各FDの具体的内容とその成果を述べる。

2. 教育改革に関する勉強会

徳島大学の教育改革を遂行するために、学長、

理事等が参加するマクロレベルFD (大学における組織改革・改善) として、下記の通り全国の大学改革の動向及び、徳島大学の現状について、議論・意見交換を行った。開催にあたっては遠隔会議システムであるポリコムを活用し、新蔵事務局特別会議室、教養教育5号館会議室、総合研究棟スキルスラボ8で実施した。開催日時、テーマ及び、発表者は下記の通りである。

第1回(2017年4月5日13時15分～14時15分)

- (1) 2017年度入試の結果詳細について(植野総合教育センターアドミッション部門長)
- (2) 教養教育の検証について(荒木教養教育院長)

第2回(2017年6月7日13時15分～15時15分)

- (1) 医学教育におけるプログラム評価について(赤池副理事)
- (2) 高等教育におけるICT活用の新しい動向及び、徳島大学のこれからについて(総合教育センターICT活用教育部門 金西教授, 高橋特任准教授)

第3回(2017年9月6日13時15分～14時15分)

- (1) 語学マイレージプログラムの導入について(宮崎教養教育院副院長)
- (2) 創新教育センターの取り組み(中間報告)(藤澤副理事)

第4回(2017年11月1日13時15分～15時15分)

- (1) 海外教育研究センターと共同した本学学生の海外派遣事業(森賀副理事)
- (2) 教養教育院の現状と課題について(荒木副理事)(赤池雅史)

3. 教育改革に関する提案・意見交換

2017年6月27日(火)の第2回教育戦略室会議において、教育担当理事から、徳島大学教育改革プランにも示されているアセスメント・ポリシーについての方向性に関する説明があった。その後、10月18日(水)の大学教育委員会において、教育の質に関する専門委員会へ、大学としてのアセスメント・ポリシーや、それを具現化しプログラム毎の成績評価基準につなげるガイドラインの策定について提案するようとの付託が行われ、11月15日(水)から、教育の質に関する専門委員会で

アセスメント・ポリシー策定に関する協議を開始した。教育の質に関する専門委員会では、アセスメント・ポリシーの策定に際して、大学全体(機関レベル)、学部・学科レベル(教育プログラムレベル)、科目レベルの3層ごとにガイドラインを作成する必要があるとの認識をまず確認し、個々の教員にとって身近な科目レベルのガイドラインの策定を最初に行うこととした。その過程で、対象と方法・手順・疑義の申し立て・及び、改訂に関する協議を重ねた。

今年中にアセスメント・ポリシーと科目レベルのガイドラインに関して大学教育委員会に於いて承認を得て、来年度のシラバス入力作業に間に合うように、シラバス作成ガイドラインの改訂に取り掛かる必要がある。特に、各科目で学生に対して期待されていることを具体的に述べている学修目標を設定し、シラバスに記載しておくように徹底することが肝要であり、各教育プログラム毎にその確認を行う体制を整備することが求められる。(川野卓二)

4. 質保証のためのミドルレベルFD

(1) カリキュラムアセスメント

a. 背景・ねらい

2016年度に実施した「質保証のための分野別ワークショップ」で抽出した、各学部等のFDにおける課題やニーズを整理し、各学部等FD委員会にミドルレベルのFDの要望を調査した。こられの調査結果をもとに、今年度は「教育プログラム・カリキュラムの評価・改善」に関するFDを実施することとした。これまでに導入したカリキュラムマップや科目ナンバリングを活用し、教育プログラムの評価・検証を行うことの意義や具体的な方法について理解し、改善に繋げることが目的である。

各学部等のカリキュラムマップを作成したグループ単位から2名以上の担当者を対象とし、カリキュラムアセスメントに関する講演会・ワークショップを開催した。講演会では、高等教育開発の専門家として、大阪大学の佐藤浩章氏を講師として招聘し、カリキュラムアセスメントに関する、我が国の政策的動向、意義、具体的な方法、ツール、事例などの解説を実施した。続いて、ワークショ

ップでは、グループ単位に分かれて、カリキュラムの評価、改善に繋げるための「カリキュラムアセスメントチェックリスト」の説明を行い、作成に着手した。講演会・ワークショップ後、継続して教育プログラム、カリキュラムにおける課題の可視化、改善に向けた検討を行う学部等については、個別に教育改革推進部門教員が必要な情報提供、支援を行うためのワーク（打ち合わせを含む）を随時開催した。継続して検討を行う希望があった学部等は、医学部医学科、薬学部の2学部等であった。

b. 概要

■講演会・ワークショップ

日時：2017年7月12日（水）17:00～19:30

場所：日亜会館2階 講義室1・2

講師：大阪大学全学教育推進機構 佐藤浩章氏

参加者：教職員48名

■継続ワーク（打ち合わせ含む）

医学部医学科、薬学部ともに、平成29年度内に「カリキュラムアセスメントチェックリスト」を完成させ、現状のカリキュラムやアセスメント方法にどのような課題が存在しているのかを把握するための自己点検を行うこととした。実施したワークショップ等は、次の通りである。なお、医学科では、ワークショップの際に使用したカリキュラムアセスメントチェックリストとは、一部フォーマットが異なる。

学部等	日程	参加者
医学部医学科	10月5日	赤池 雅史
薬学部	8月8日 12月12日	柏田 良樹
		難波 康祐
		藤野 裕道
		佐藤 陽一

c. 成果と課題

講演会・ワークショップ終了直後に実施した参加者アンケートの結果を図1に示した。アンケート結果より、「教育プログラムの評価・改善の意義について理解することができた」という設問に対して、94%の参加者が肯定的な回答をしていることから、カリキュラムアセスメントの意義や必要性などを理解することができたと言える。一方、「自身の学部・学科等において取り組むべき課題が明らかになった」、「自身の学部・学科等にとって有意義なものであった」という設問については、約20%参加者が「どちらともいえない」、「どちらかといえば当てはまらない」と回答していることから、カリキュラムアセスメントを実施していく上で、具体的に取り組むべきことを見出すまでは至っていない学部等の担当者が存在することが分かる。

また、講演会・ワークショップを受けて、継続的にカリキュラムアセスメントのワークを実施していく学部等が2つあったことから、今後、全学的にカリキュラムアセスメントを実施することになった際には、先駆的な実践事例として、有益な知見が得られることになると考えられる。（吉田 博）

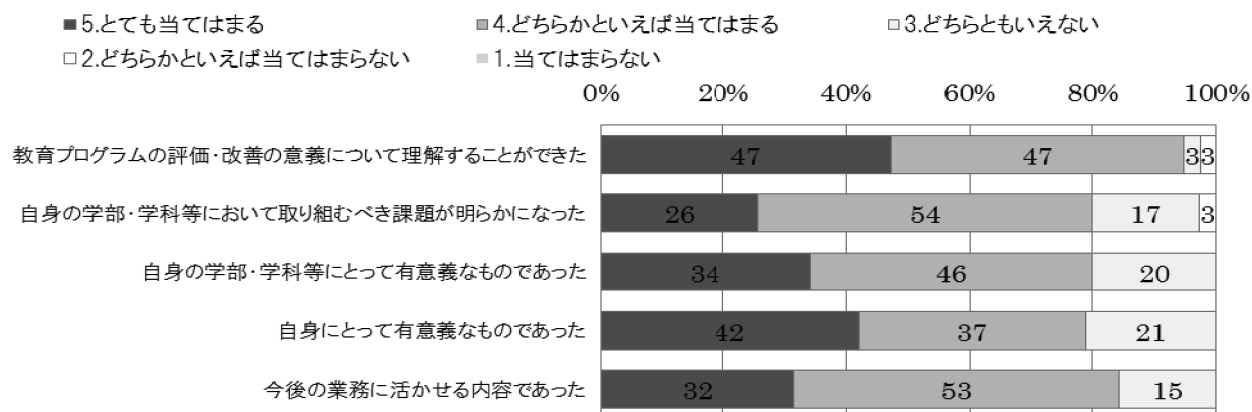


図1 講演会・ワークショップのアンケート結果

(2) ナンバリング併記

2017年6月21日(水)開催の大学教育委員会において、カリキュラムマップへの科目ナンバリングの併記作業着手が確認された。本学では、2014年度に各学科・コース・専攻のカリキュラムマップを作成した。また、2015年度には、授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する科目ナンバリングシステムを導入し、徳島大学ホームページ上に公開している。2016年度に実施した、教員に対するティーチングライフ調査、学生に対するラーニングライフ調査によれば、教員、学生ともにカリキュラムマップの認知度は科目ナンバリングの認知度に比べると高いが、まだ十分とは言えない状況にあった。

そこで、本年度のミドルレベルFDとして、カリキュラムマップを最新の状態に更新すること、及び、科目ナンバリングが未設定の科目にナンバリングを行うこと、更に、カリキュラムマップに科目ナンバリングを併記することによって、学生や教員がカリキュラム全体をより容易に俯瞰できるツールを提供する作業を実施した。併記作業を2018年1月末に終え、各学科・コース・専攻における確認を経た後、大学教育委員会の承認を受けて、掲示物として提供することができるポスターを作成することとした。

5. 授業設計ワークショップ

実質的なFDの取り組みを進めるため、徳島大学の教育の質向上及び、問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修である「授業設計ワークショップ」を実施した。本ワークショップは、授業参観・授業研究会、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップと共に「教育力開発コース」の1つであり、これら3つのプログラムを連続的に提供し、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にして授業改善に繋げるといった一連のプロセスを支援するためのものである。本節では、授業設計ワークショップの内容及び、成果と課題について報告する。

a. ねらい

本ワークショップは、授業設計の仕方と教育技術について学ぶものである。主な活動内容は、さまざまな授業方法を学び、シラバスと授業計画の作成を行い、模擬授業を実施することである。アクティブ・ラーニングの理論や手法、授業の目的・到達目標の設定、授業実施の留意点、評価方法等に関する講義やワークを通して、参加者が自身の授業について考え、振り返ることにより、実践的な教育力の向上を目指している。本ワークショップの目標は次の4つである。

- ① FD活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画し、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD参加者同士の仲間づくりができる。

また、今年度は参加者がワークショップの講義部分(昨年度まではワークショップ内で実施していた講義)を、ビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する反転授業形式を導入し、ワークショップの時間を約3時間程度短縮して実施した。

b. 概要

■開催期日

2017年6月17日(土)～6月18日(日)

■会場

医学部保健学科C棟 C-23 講義室 他

■対象者

本ワークショップは学外(SPOD)へ開放しているため、学内のみならず、学外の教員も対象としている。

学内の対象者は、学外より講師または准教授採用後1年以内の教員、及び、学内で助教から講師または准教授昇任後1年以内の教員を中心とし、2016年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者、推薦を受けた者(助教及び、教授等)も対象としている。ただし、所属が教育系以外のセンター等、病院、及びプロジェクト採用等の教員は除いた。また、次に該当する教員は参加を免除した。①学外で同様の研修を受けた教員、②担当する授業がない教員、③診療業務を主に担当し

ている教員。

学外の対象者については、徳島県の大学・短大・高専 (T-SPOD) 及び、その他 SPOD 加盟校の教員とした。

■参加者

今年度の参加者は、教員 15 名 (徳島大学 13 名、学外教員 2 名) であり、詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏 名	所 属	職 名
柴田 堯史	総合科学部	講 師
今井 芳枝	医 学 部	准教授
丸山 将浩	医 学 部	准教授
江川麻理子	医 学 部	講 師
川中 崇	医 学 部	講 師
多田 恵曜	医 学 部	講 師
中尾 玲子	医 学 部	講 師
大島 正允	歯 学 部	准教授
細木 眞紀	歯 学 部	講 師
南川 丈夫	理 工 学 部	講 師
石川 真志	理 工 学 部	講 師
水口 仁志	理 工 学 部	講 師
刑部祐里子	生物資源産業学部	准教授

【学外教員 (SPOD)】

氏 名	所 属	職 名
伊藤 弘道	鳴門教育大学	准教授
小西 智也	阿南工業高等専門学校	准教授

■運営メンバー

運営メンバーは、副学長 (教育担当)、総合教育センター教育改革推進部門長 (FD 委員会委員長)、FD 委員会委員を含め、教員 13 名、教育支援課職員 2 名の計 15 名であり、詳細は次の通りである。

氏 名	所 属	職 名
高石 喜久		副学長
赤池 雅史	教育改革推進部門	部門長
長尾 文明	理 工 学 部	教 授
岩田 貴	教養教育院	教 授
上田 哲史	情報センター	センター長
酒井 徹	医 学 部	教 授
川野 卓二	教育改革推進部門	教 授
宮田 政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田 博	教育改革推進部門	講 師

新原 将義	教育改革推進部門	助 教
上田 勇仁	教育改革推進部門	特任助教
上岡麻衣子	教育改革推進部門	特任研究員
金西 計英	ICT 活用教育部門	教 授
福川 利夫	教育支援課	課 長
金治志津子	教育支援課	専門職員

■内容

2 日間にわたり、表 1 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者や運営スタッフが交流を行いながら、お互いについて知ることができるようにワークショップを実施した。具体的には、15 人の異なる参加者に対して、ワークシートをもとに質問を投げかけながらお互いの自己紹介を行う「アタック 15」というワークを行った。

「(3) ワーク 授業設計の基本」では、事前にビデオ教材による講義「アクティブ・ラーニング」と「成績評価の仕方」を視聴した上で、参加する、反転授業形式で実施した。はじめに、事前学習に関する確認として、スマートフォンを活用して簡単なクイズを実施した。同時に、反転授業を実施する際の注意点や、スマートフォンを活用したクイズの作り方などの説明を行った。続いて、「学生の学習を促進する事例カード」を紹介し、授業設計を行う際に検討すべき点を説明し、参加者の授業に取り入れることができそうな事例を確認した。

「(4) ワーク 自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、教育理念を整理するためのミニワークと「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の説明を行った。また、ティーチング・ポートフォリオを作成し、教育改善に活かしている、医学部医学科の三笠洋明准教授に、意

義や具体的な活用事例を紹介してもらった。

「(5) 講義・ワーク 授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、参加者があらかじめ作成したシラバス、授業計画書の検討・修正を行った。その後、参加者間でシラバスを交換して相互チェックを行った。[2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各教室に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員会の教員、総合教育センター教育改革推進部門の教員がコンサルタントや司会者として入り、支援を行った。模擬授業の手順は、はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある一部分の 15 分間を切り取り、その授業を実施した。模擬授業の様子は撮影され、その後の授業検討会で視聴しながらフィードバックを行った。グループの参加者は学生の立場から模擬授業に参加した後、チェックリストに基づき授業の検討を行った。この他にも良かった点、より良くするための提案について自由記述形式で用紙に記入し、模擬授業実施者へのフィードバックを行った。

授業検討会は、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら検討を行う取り組みとして行われた。

「(7) 模擬授業の振り返り」では、模擬授業に対する全体的なコメントがあり、その後参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し、グループのメンバーからももらった意見をまとめ、今後のアクションプランを作成した。最後に、各グループから代表 1 名が、研修で学んだことやアクションプランを紹介し、全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では、《授業設計ワークショップ》⇒《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では、ワークショッ

プ全体に対する講評があり、その後参加者に修了証書が授与され、終わりの言葉によって締めくくられた。

c. 成果と課題

■プログラムの到達目標に関する成果

[到達目標①: FD 活動の理念、活動計画を理解することができる]

FD 活動の理念、活動計画に対する理解については、「(1) オリエンテーション」で、我が国の教育改革の流れや徳島大学の教育改革について説明があり、また「研修のねらいと意義」において、全学的な教育方針、全学 FD 推進プログラムの目的とその意義、教育力開発コース、本ワークショップの目的、意義について説明があった。また、「(9) プログラムのまとめ」において、授業参観・授業研究会、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップについての説明もあった。これらの説明により、参加教員は徳島大学の全学 FD 活動について概ね理解することができたと思われる。[到達目標②: 授業を計画し、実施し、評価する方法を体得することができる]

授業計画、評価の方法については、目的・目標の設定、評価の仕方を学び、チェックシートをもとに、自身の授業におけるシラバスや授業計画書の修正を行った。また、アクティブ・ラーニングの理論や特徴、効果に関する講義ビデオを視聴し、実際に反転授業を体験することで、具体的に授業設計に関するポイントを押さえることができたと思える。また、学生の主体的な学習を促進するという視点から、さまざまな授業実践の例に触れ、参加者自身が体験しながら理論を学ぶことができ、自身の授業の目的に沿った適切な授業方法を知ることができた。この点については、d. アンケートの自由記述からも読み取ることができる。[到達目標③: 授業研究の仕方を理解し、実践することができる]

模擬授業の計画と準備、模擬授業の実践を通して、評価視点のポイントを示しながら、相互評価を行うことで、その理解が促されたと考える。模擬授業実施では、授業を実践するために必要な評価視点(枠組み)を伝えた上で、相互評価を行う機会を設けたため、体験的に授業研究の方法につ

いて理解できたと考える。また、自身が行った模擬授業の映像を視聴しながら議論を行ったことで、「授業参観・授業研究会」への継続を意識して授業検討会を実施することができたと考える。

アンケートから、ワークショップに参加して良かった点を記載する項目では、模擬授業や授業検討会が良かったと挙げた参加者が多い。

また、「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思うか」という設問では、100%の参加者が肯定的な回答をしていることから、研修後の授業実践に繋がる成果を得ることができたと推察できる。(図 2)

[到達目標④：FD 参加者同士の仲間づくりができる]

ワークショップ全体を通して、できる限り相互交流の機会を設け、お互いに研鑽して信頼し合う関係性の構築を意識した。具体的には、各セッションのワークでは、授業に対する考え方を相互に理解するためのペアワークの機会を設定したことが挙げられる。また、2 日目には模擬授業を実施し、お互いの授業から学びつつ、相互に高め合う相互研鑽の関係を構築する機会を設け、最後にはグループ単位でワークショップ全体を振り返りながら発表し合う機会を設定した。アンケートの「新たに人的なつながりをつくることができたか」という設問においては、94%の参加者が「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答しており、関係性の構築という視点からは、本ワークショップの成果はあったと考えられる。

■研修全体の成果と今後の課題

図 2 に示したアンケート結果では、各設問の肯定的な回答が 90%を超えており、ワークショップの満足度や自身の教育への取り組み方が改善されるという設問では、100%の参加者が肯定的な回答をしている。このことからワークショップが参加者にとって有益であったことが伺える。本ワークショップの主目的である授業設計に関連する項目では、授業の新しい方法や理論を知ったり、自身の授業を見直すきっかけになったり、改善点に気づくことができたことなどがアンケートの自由記述から分かる。特に、模擬授業を通して、相互の授業技術の共有や自身の課題に気づくことがで

きたことが分かる (d.アンケートの自由記述参照)。

また、今年度はじめてビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する反転授業形式を導入した。これまでは、反転授業について、ワークショップ内で解説を行っていたが、参加者が実際に体験することで、実施する際のポイントやメリット、デメリットに気づくことができたと考えられる。実際に、アンケートの設問「反転授業形式を体験することで反転授業を実施する際の留意点に気づくことができた」では、94%の参加者が肯定的な回答をしている。さらに、図 2 より、反転授業形式での実施を希望する参加者が多いことが分かる。

一方、アンケートの改善点を記述する設問において、事前学習のビデオ教材に関する提案がいくつか挙げられた。ビデオ教材の長さや内容については、検討の余地があることが分かる。また、アクティブ・ラーニングの実際の授業風景なども見たいという希望があることから、本学が幹事校を務める大学教育再生加速プログラムのテーマ I 採択校が進めている「Find アクティブ・ラーナー」の動画サイトなどを活用することも考えられる。

d. アンケートの自由記述

最後に、ワークショップ終了直後に実施したアンケートの自由記述の回答を示す。ただし、重複がある内容は統合し、表現を一部修正している。() は統合した記述内容に関する回答数を表している

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。(複数回答可)

- ◆話し方のスキル (4)
- ◆成績評価の仕方 (2)
- ◆双方向的な講義・発問のスキル (2)
- ◆シラバス作成のスキル
- ◆効果的なアクティブ・ラーニングの技法
- ◆授業内容を学生に興味を持たせる方法
- ◆学習の振り返りの仕方
- ◆学生とのかかわり方
- ◆講義ビデオの録画、編集技術
- ◆教材・資料の作り方
- ◆ティーチング・ポートフォリオ作成の仕方
- ◆その他 (2)

(2) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

- ◆他の先生方の講義方法が参考になった。
- ◆”授業”についてあまり積極的に考えていない部分もこれまでであったが、自分の中にある指導に際する”考え方”を整理しなければならないと感じるきっかけとなった。
- ◆シラバス作成法、アクティブ・ラーニングへの理解が深まった。
- ◆参加する前には気づかなかった自分の課題が明確になった。
- ◆他の先生の講義を聴いて自分の講義と比較できたこと。
- ◆モチベーションを上げることが出来、いろいろな先生方と情報交換できてよかった。
- ◆反転授業やアクティブ・ラーニングなど、概念でしか知らなかったことが、今回具体例を通して理解でき、自分の授業への取り入れのハードルが下がりました。
- ◆他の先生方の授業の工夫がわかったこと。
- (3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書き下さい。
- ◆ビデオ教材の時間を短くする。(3)
- ◆反転学習の内容をサマライズした資料を用意しておいてほしい。
- ◆模擬授業、シラバスはある程度経験してから受ける方が良いむしろ、アクティブ・ラーニングの成功例、失敗例を示してもらって議論する方が良かった。
- ◆アクティブ・ラーニングの授業風景などの実例を見てみたいです。
- ◆プログラム、進行ともに前倒しですすめられてすばらしかった。
- ◆各セッションの時間も適切だったと思う。
- (4) その他、お気づきの点があればご記入下さい。
- ◆4月早々の実施を希望します。
- ◆授業参観は、ある程度こなして、自分で省察終わってから(2~3年目)が良いように思う。
- ◆スタッフの方とのディスカッションの時間をもう少し長くっていただきたいです。質問応答、コンサルタント等。(吉田 博)

表 1 2017 年度授業設計ワークショップ日程

授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)

日時: 平成 29 年 6 月 17 日 (土)

場所: 蔵本キャンパス 医学部保健学科 C 棟 C-23 講義室

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30-12:50	・受付 (医学部保健学科 C 棟) ※12:45 までにお集まりください		11:00AM 退席時に「大田 賢一」かつ「藤田 雅之」または「山本 賢一」かつ「藤田 雅之」が 出ていたら中止
12:50-13:30	(1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・研修のねらいと意義	吉田 博 (進行) 副学長 (教育担当) 高石 喜久 FD 委員会委員 赤池 雅史	保健学科 C 棟 C-23 講義室
13:30-14:00	(2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	上岡 麻衣子	保健学科 C 棟 C-23 講義室
14:00-15:00	(3) ワーク「授業設計の基本」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・成績評価の意義・方法 ・学生の学習を促す授業方法	吉田 博 上田 勇仁	保健学科 C 棟 C-23 講義室
15:00-15:10	休憩		
15:10-16:10	(4) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること	吉田 博 新原 将義 三笠 洋明	保健学科 C 棟 C-23 講義室
16:10-16:20	休憩		
16:20-17:45	(5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	宮田 政徳 スタッフ 全員	保健学科 C 棟 C-23 講義室
18:00-20:00	交流会 (任意参加)	吉田 博	保健学科 C 棟 C-13 講義室

※事前に「授業設計ワークショップ」の講義ビデオのうち、指定された講義を必ず視聴して下さい。当日はビデオによる学習を行っていることを前提に、参加者間でのグループワーク等を行います。

授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)

日時: 平成 29 年 6 月 18 日 (日)

場所: 蔵本キャンパス 医学部保健学科 C 棟 C-23 講義室他

(集合後、模擬授業を実施する教室へ移動します。)

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
9:00-9:30	・集合、模擬授業準備 (教材印刷が必要な場合は 9:00 集合)	スタッフ	集合: 保健学科 C 棟 C-23 講義室
9:30-12:10	(6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】(1 人 25 分×4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点、改善点等を検討する。	各班司会: FD 委員 ワーク支援: スタッフ 全員	(模擬授業実施手帳) 教室: 各班グループ部屋へ移動
12:10-13:10	休憩 各自で昼食		* 生徒休業
13:10-13:40	(7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	川野 卓二 吉田 博	保健学科 C 棟 C-23 講義室
13:40-14:00	(8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	吉田 博	保健学科 C 棟 C-23 講義室
14:00-14:40	(9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田 博 (進行) FD 委員会委員長 赤池 雅史	保健学科 C 棟 C-23 講義室

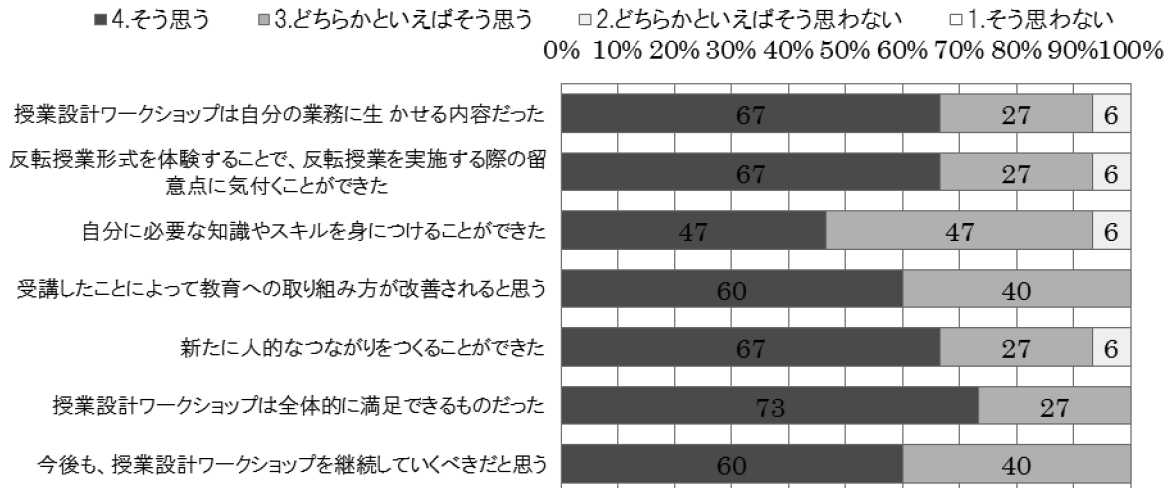


図 2 2017 年度アンケート結果

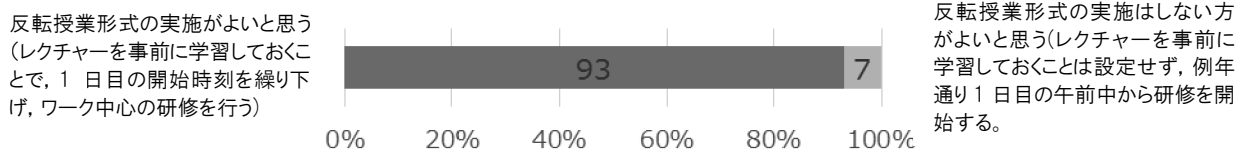


図 3 ワークショップの実施形式について

6. 授業参観・授業研究会

a. 授業参観・授業研究会の目的

徳島大学では、全学 FD 推進プログラムの一環として、「授業参観・授業研究会」を実施している。授業参観・授業研究会では、個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD を目指しており、その目的は、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有化である。対象は今年度より「授業設計ワークショップ」受講者を主な対象としているが、希望者も受け付けている。

b. 授業参観の流れ

授業参観・授業研究会は、次の流れで進めている。

授業への参観・映像撮影・学生アンケートの実施
↓
学生アンケート整理・映像編集
↓
授業研究会（発表・映像視聴・議論）

まず、センター教員と撮影担当者が、各教員の授業を参観し、簡単なメモ(授業内容のまとめ、

時間経過、特筆すべき発言や出来事)をとりつつ、授業をビデオカメラの映像に収める。授業終了時には、学生へのアンケート(その日の授業で良かった点、改善して欲しい点、授業に関する先生へのメッセージについて)を実施する。さらに時間があれば、教員に授業に関する簡単なインタビューを行う。

その後、授業映像をもとに、センター教員が授業の主要部分の映像を編集する。編集映像は授業の展開が分かるように、各まとめから数分間の映像を抽出し、合計で 15 分強になるようまとめた。さらに、授業参観より一週間以内に、編集映像、学生アンケートの結果をもとにした「授業研究会」を開催する。そこでは、様々な部局からの参加者を交えて、授業改善の知恵を出し合い、また授業からいろいろなことを学び合うことを目指した。

c. 授業研究会

授業研究会は以下のような手順で進めた。所要時間は全部で 1 時間ほどである。

簡単な説明(授業全体のねらい/この日のねらいなど:対象者の先生より 5 分)

↓

授業映像視聴 (15 分)

↓

授業参観者報告・学生アンケートから読めること
(総合教育センター教員より 5~10 分)

↓

授業者解説 (当日の様子/授業でうまくいっている点・お困りの点など各論:対象者の教員より 5~10 分)

↓

自由討論 (あるいは課題討論 10~15 分)

2017 年度は 15 名の教員に対して授業参観・授業研究会を行った。

●第 1 回 2017 年 4 月 19 日 (水) 17:00~17:50

・開催場所: 栄養学棟チュートリアル室 204

・授業担当者: 瀬川博子 講師

(大学院医歯薬学研究部)

・授業題目: 『基礎栄養学実習』

・共催: 医学部 FD 委員会

・内容: 先生の授業は、前回の内容の復習と補足説明で始まり、その後、実験の順序・方法や注意点が解説された。実験中は 2 人の TA と一緒に班別の実験を見回り丁寧に助言・指導されていた。

授業研究会では、授業を撮影した映像を一部視聴し、先生が親しく学生に質問している様子から学生との距離が近いことが分かった。また学生への授業アンケートで、「実験の説明が分かり易く、質問にも丁寧に答えてくれた」という意見が多数あった。

●第 2 回 2017 年 5 月 16 日 (火) 14:40~15:40

・開催場所: 授業研究インテリジェントラボ

・授業担当者: 橋本直史 講師

(大学院社会産業理工学研究部)

・授業題目: 『経済学基礎』

・共催: 生物資源産業学部 FD 委員会

・内容: 先生の授業の目的は、経済学の初歩的・基本的な考え方を学び、それによって現実の経済に対する関心・認識を深めていくことである。参観当日の授業は 5 回目の「市場の失敗と政府の役割」というテーマであった。需要と供給の市場のメカニズムが理想的に機能しない場合、

政府がどのように市場に関わっていくかが講義された。授業ではテキストは使用しないで、先生が作成されたレジメに沿って行われたが、レジメにはキーワードが穴埋め式になっていて工夫されていた。

授業研究会では、どのようにして学生に予習や復習を促したらよいかという話題になり、事前に予習用のプリントを配って授業の初めで小テストを行うことや学生の理解を確認するため、15 週の間でテストを行ったり、授業終了時に分からなかった所等を書かせたりするのが良いのではないかという意見が聞かれた。

●第 3 回 2017 年 6 月 1 日 (木) 16:30~17:30

・開催場所: 医学部臨床 A 棟 1F スキルスラボ

・授業担当者: 松本高広 准教授

(大学院医歯薬研究部)

・授業題目: 『動物実験学・放射線概論』

・共催: 医学部 FD 委員会

・内容: 先生の授業は、前半の実験動物学を松本高広先生、後半の放射線概論を原田雅史先生が担当している。松本先生の実験動物学の授業の目的は、医学研究のため動物実験の必要性を理解し、基礎的生物学を学びながら、最先端の医療技術を学ぶことである。授業ではテキストは使用しないで、先生が作成されたパワーポイントのレジメに沿って行われた。前回の復習でノックアウトマウスの作出方法から始まり、ゲノム編集技術の概要が講義された後、小レポート課題として次世代の遺伝子改変技術について自由にアイデアを書く時間があつた。最後は再生医療に活用できる iPS 細胞について説明があつた。

授業研究会では、アンケートに見られる学生のコメントを基に話し合いを行った。「難しい内容を丁寧に分かり易く説明してくれている」、「授業の合間にジョークを挟んでくれるので眠くならない」といった意見が多くみられた。また先生の意図する医療に対する動機付けに関して「iPS 細胞などの最先端の研究で医学に強く惹き付けられた」という意見がみられ、学生たちの学習意欲が高められていることが分かった。

●第 4 回 2017 年 6 月 2 日 (金) 14:30～15:30

- ・開催場所：附属図書館蔵本分館グループ室 1
- ・授業担当者：谷岡広樹 助教 (情報センター)
- ・授業題目：『医療情報処理学』
- ・共催：情報センターFD 委員会
- ・内容：先生の授業は、オムニバス形式で行われている授業「医療情報処理学」の中の表計算実習に関わる部分であった。学生がノートパソコンを持ち込み、講義と実習を同時に行うような形で実施された。授業内容をまとめた配布資料があり、それにしたがってエクセルで実演しながら授業が進められていた。また、机間巡視を行い、学生の近くに行き学生が質問しやすい状況を作っていた。

授業研究会では、学生に行ったアンケートを基に話し合われた。情報実習室での授業でないため個々の学生が使用している機種が異なり、その対応の難しさが浮き彫りになった。授業のペースが少し速いと感じている学生が多く、重要な部分の説明を繰り返し行うことなどの要望が出されていた。

●第 5 回 2017 年 7 月 4 日 (火) 10:20～11:20

- ・開催場所：共通講義棟 201 講義室)
- ・授業担当者：大石昌嗣 准教授
(大学院社会産業理工学研究部)
- ・授業題目：『エネルギー環境工学』
- ・共催：理工学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、機械と電気コースの学生が対象となっている。前回の復習を行い、様々な観点から整理し、よく練り上げた内容の PPT スライドを準備して、画像や図表が多く、学生にとってわかりやすいものであった。また、授業の中ほどと終盤に、授業で取り上げた内容に関連した課題を出したりして、授業内容の定着へ工夫があった。

授業研究会では、アンケートに見られる学生のコメントを基に話し合いを行った。学生は、授業で用いる資料を配布して欲しいと感じており、その配布のタイミングや文字の大きさ、課題を解くために配分する時間の長さや、学生同士で話し合いながら考えられる課題を作成すること等が話し合われた。

●第 6 回 2017 年 7 月 19 日 (水) 17:55～18:55

- ・開催場所：医学部臨床 A 棟泌尿器科カンファレンス室
- ・授業担当者：山口邦久 講師
(大学院医歯薬学研究部)
- ・授業題目：『腎移植総論』
- ・共催：医学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業では、図表が多く、よく準備されたわかりやすいスライド資料が使われていた。最初に、流れに沿った授業のポイントが示された。腎不全治療の現状、腎移植の種類とその相違点、臓器提供基準と適合・不適合の判断方法、臓器移植法の改正点などが扱われた。授業の最後の方で、実際の臨床場面で移植手術を行う際のスケジュールなどが紹介され、学生にとっては現場についてより詳しく知る機会となっていた。

授業研究会では、教えるべき内容が多い医療系の講義で、学生が理解できているかどうかを判断する方法や、ファジーな事柄についてディスカッションするような時間を入れてみることに等についても話し合われた。

●第 7 回 2017 年 9 月 29 日 (金) 14:10～15:10

- ・開催場所：医学部臨床 B 棟 8F 第 7 カンファレンス室
- ・授業担当者：江川麻理子 講師
(大学院医歯薬学研究部)
- ・授業題目：『ぶどう膜・視神経疾患』
- ・共催：医学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、医学部医学科 4 年次の必修科目で、眼科に関する知識を習得することを目的としている。学生が具体的なイメージを持てるように、いくつかの症例をもとに写真を用いて詳しく解説された。授業終了時には、学生の理解度を把握するための小テストを行い、学生アンケートからも、説明が丁寧で分かりやすいという意見がいくつか挙げられていた。

授業研究会では、説明すべき内容をどのように絞ることができるのかを議論し、小テストの内容や時間配分、タイミングも有効的に活用することで、学生の理解を促進できるように改善するポイントを検討した。

●第 8 回 2017 年 10 月 19 日 (木) 13:00~14:00

- ・開催場所：歯学部棟 2F 顎機能咬合再建分野医局
- ・授業担当者：大島正充 准教授
(大学院医歯薬研究部)
- ・授業題目：『歯科補綴学講義 2(A)』
- ・共催：歯学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業の目的と到達目標は、冠橋義歯学（クラウン・ブリッジ）に関する歯科補綴学の理論と技術の基本的事項について修得することであった。授業冒頭では、反転授業用のビデオを視聴した上で答える WEB テストを行い答えを学生に当てながら内容が解説された。その後 30 分で反転授業用ビデオの内容に関する詳細な補足説明があり、最後には当日の授業の確認テストとして授業内容についての国家試験に準じた問題を扱い、実際の臨床事例を示しながら解説された。

授業研究会では、授業を撮影した映像を一部視聴したことで大島先生がやや早口になっていることが分かった。また学生への授業アンケートでは、「授業前に WEB 上で前もって今日の授業内容が分かり、さらに WEB の小テストで理解した上で授業に臨めるので分かり易い」と反転授業に対して好評の意見が多数あった。授業に関する悩みは、知識も理解力も違う学生のどのあたりに授業内容を設定して行ったら良いかが挙げられた。これは大学の授業の永遠のテーマであるが、各レベルの学生が反応するような複数の内容を講義中に入れ込んでいくしかないのではないか、という結論に達した。

●第 9 回 2017 年 10 月 20 日 (金) 12:00~13:00

- ・開催場所：共通講義棟 4F403 講義室
- ・授業担当者：水口仁志 講師 (大学院理工学研究部)
- ・授業題目：『機器分析化学』
- ・共催：理工学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、工学部化学応用工学科 3 年次の選択科目で、化学の領域で用いられる分析機器について、測定原理や装置構成を理解することを目的としている。機器の説明の中でも、具体的な実験データを紹介し、理論と実験を結び付け

ながら丁寧に解説されていた。学生の授業への集中を高め、理解を促進するために、授業終了時に確認テストを実施し、次の授業予告、資料の配布、予習課題を課すなどの工夫を毎授業実施されていた。

授業研究会では、反転授業を導入するために、必要な機材やソフトウェア、学内のシステム、ビデオ教材を作成する際のポイントなどの共有を行った。また、授業中の学生とのやり取りや説明のスピードなどについても意見交換を行った。

●第 10 回 2017 年 10 月 25 日 (水) 12:10~13:10

- ・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・授業担当者：柴田堯史 講師
(大学院社会産業理工学研究部)
- ・授業題目：『憲法 II』
- ・共催：総合科学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、過去の判例を一つひとつ丁寧に掘り下げながら解説されているのが印象的だった。また、表現の自由や 18 歳選挙権など現代に生きる学生にとって考えるべき題材を取り上げながら、憲法のもとで生きていくための講義が行われていた。

授業研究会では、学生のアンケート結果を参照しつつ柴田先生が活用されている学内システム Manaba の利用状況などについて共有を行った。また、同じ学部にも所属している先生から「憲法 II」のなかで学生達に伝えてもらいたいことについてのコメントがあった。

●第 11 回 2017 年 10 月 26 日 (木) 12:00~13:00

- ・開催場所：医学部保健学科 C 棟 1F セミナー室
- ・授業担当者：今井芳枝 准教授
(大学院医歯薬学研究部)
- ・授業題目：『高齢者援助論』
- ・共催：医学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、医学部保健学科看護学専攻の専門科目で、加齢による心身の機能低下に加えて、様々な疾患を抱える高齢者を包括的に理解し、高齢者の QOL の向上を目指した援助のあり方と具体的な援助技術について学習することを目的としている。先生がこれまで目にしてきた高齢者援助の事例をピックアップし、学習教材とすることで、現場で起こる様々な事態を基にした解

説がなされ、理論的な解説と実践的な見地からの指導とを行き来する授業が展開されていた。学生アンケートからは、「事例をもとにどの知識を使えば良いか結び付けられた」といった意見の他、「私も先輩達のように広い視野で患者さんを看て、アセスメントできるか心配になったが、より良い実習となるように現在の勉強からさらに頑張ろうと思った」といった意見も挙げられ、実習を控えた学生にとっても有意義な時間となっていたことが窺えた。

●第 12 回 2017 年 11 月 28 日 (火) 12:00～13:00

- ・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・授業担当者：向井理恵 准教授
(大学院社会産業理工学研究部)
- ・授業題目：『基礎食品化学』
- ・共催：生物資源産業学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、生物資源産業学部 1 年次の必修科目で、生物資源産業学部の学生が、どのコースに進級しても必要になる食品化学の基礎を習得することが目的である。学生の理解を促進するために、授業終了時には復習すべき点をスライドで示し、次の授業の冒頭では復習内容に関する確認テストを実施している。授業の解説においても、身近な例を紹介したり、学生に挙手をさせて理解を確認しながら進めるなどの工夫がなされている。

授業研究会では、学生の理解度の差が大きいことについて、授業のレベルを落とさずに対応する方法などを共有した。また、授業を高学年の学習や将来の研究と結びつけるための工夫についても意見交換を行った。

●第 13 回 2018 年 1 月 11 日 (木) 15:45～16:45

- ・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・授業担当者：石川真志 講師
(大学院社会産業理工学研究部)
- ・授業題目：『基礎機械 CAD 製図』
- ・共催：理工学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、機械科学コースの必修科目で、機械図面を正しく判読する力を養うこと、及び、3 次元 CAD (Computer-Aided Design) による 3 次元形状モデリングの基礎を理解し、3 次元モデルからの図面作成法を習得することを

目的としている。はじめに専用ソフトを用いた 3 次元形状モデリングの方法について解説を行い、その後教室を移動して学生自身が製図課題の演習を行うという、2 段階の過程を経て授業が行われていた。学生アンケートからは、「実際にすることを前もって PC 画面で説明する点」を評価する意見や、「実際に行う操作が目の前で見られるので分かりやすくスムーズに作業に入れると思います」といった意見が寄せられ、石川先生の事前の細やかな解説が学生にも高く評価されていることが見受けられた。

授業研究会では、はじめからソフトを学生が操作する演習に入るのではなく、解説と演習という 2 段階構成の授業デザインについて議論された。この授業の進め方は機材の入れ替えに伴ってやむを得ず考えたものだということだったが、学生のアンケートの中にはこの進め方が理解につながったという回答も見られたことから、特にソフトの操作に不慣れな時期にこうした 2 段階構成の授業は有効なのではないかという意見があった。

●第 14 回 2018 年 1 月 23 日 (火) 11:00～12:00

- ・開催場所：授業研究インテリジェントラボ
- ・授業担当者：丸山将浩 准教授
(大学院医歯薬学研究部)
- ・授業題目：『生化学実習』
- ・共催：医学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業の目的は、医学科高学年次で行う臨床医学の専門知識習得に生かせる基礎医学を学ぶことである。授業は講義と実習で構成されており、前半の講義では、生化学実習教本を参照しながら予習と合わせて、抗原抗体反応の仕組みや生体内での反応例を挙げて、免疫組織化学染色法への抗原抗体反応の応用の仕組みや染色を行う対象組織の解剖学的構造が解説された。後半の実習では、マウス脊髄組織切片を使ってニューロンの染色実験が行われた。学生への問いかけも随時見られ、学生との交流もあって和やかに授業が進められていた。実習の最後では実験結果をまとめるレポート提出が指示された。

授業アンケートでは、良い点としてほとんど

の学生が「説明が丁寧で分かり易い」という意見を述べていた。この授業のすぐれた点は、生化学実習書以外にも先生が独自に実習の注意点を書いた「下敷き」を各実習テーブルに配付しており、学生の実習の手助けになっていることである。

- 第 15 回 2018 年 1 月 24 日 (水) 12:10～13:10
- ・開催場所：藤井節郎記念医科センター2F(1)室
- ・授業担当者：中尾玲子 講師
(大学院医歯薬学研究部)
- ・授業題目：『応用栄養学』
- ・共催：医学部 FD 委員会
- ・内容：先生の授業は、1 年次に栄養学の基礎を学んだ学生に対し、運動時や高温・低温環境といった特殊な環境下でのエネルギー代謝や栄養摂取、また各ライフステージにおける栄養学の特徴といった、より実践的な内容について理解することを目的としている。授業では、生体の 1 日の生活リズムに関わる「サーカディアンリズム」をテーマに講義が進められ、様々な身近な例をもとに体内時計の仕組みについて解説がなされた。その後、学生同士で「サーカディアンリズムに影響を及ぼす可能性のある栄養素は何か」「摂取した時刻により効能が異なる栄養素は何か」についてディスカッションを行い、さらにその内容について先生が解説するというアクティブ・ラーニング形式の活動が行われていた。

授業研究会では、グループワークをさらにスムーズに進める工夫や、専門以外の領域に関する授業の難しさなどについて議論が交わされた。特に、国家試験の過去問を授業内で扱う意義について、学生の注目を集める以外に、国家試験の出題内容の正統性 (authenticity) を確認するといった意義もあるのではないかという意見が挙げられた。

学生のアンケートでは、「いつも要点のまとめられた簡潔な授業なのがうれしいです」など、授業の構成について高い評価が集まった他、「面白くて好きです。もっとお話ししてみたい」など、先生の人柄を感じさせる記述が多く寄せられていた。
(宮田政徳)

7. ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

a. ねらい

実質的な FD の取り組みを進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を開催した。本ワークショップは 2011 年度に初めて開催して以来、今年度は 7 回目の開催である。本ワークショップは、教育の質向上及び、問題解決のための相互交流と日常的な教育改善のための研修の一つとして実施し、到達目標は次の通りであった。

- ① 自身の教育活動を振り返り、教育理念と教育目的を整理することができる。
- ② 自身の教育活動を振り返り、教育戦略・方法を整理することができる。
- ③ 自身の教育活動を振り返り、成果と具体的な課題を整理することができる。
- ④ 参加者同士の関係をつくることができる。

本ワークショップは、SPOD の FD プログラムであるため、徳島大学教員だけでなく、SPOD 加盟校の教員も対象としている。ティーチング・ポートフォリオは、教員個人が教育活動を振り返り、自身の教育理念、教育目的、戦略、方法、成果、課題などを中心にまとめていくものである。参加教員 (メンティー) にメンターが寄り添い、話し合いを重ねながら自身のティーチング・ポートフォリオを作成する。参加者同士で対話を行いながら、自身の教育活動について 3 日間集中して振り返る作業を行っていくものである。

b. 概要

■開催時期

2017 年 9 月 6 日 (水) ～9 月 8 日 (金)

■会場

日亜会館 2 階講義室 1

■参加者

氏 名	所 属	職 名
上田勇仁	教育改革推進部門	特任助教
岡部千鶴	徳島文理大学	教 授

■運営メンバー及び、メンター

氏 名	所 属	職 名
赤池雅史	教育改革推進部門	教 授

小林直人**	愛媛大学	教授
川野卓二	教育改革推進部門	教授
宮田政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田 博*	教育改革推進部門	講師

*はメンター担当, **はスーパーバイザー担当
教員

■内容

3 日間にわたって表 2 のプログラムを実施した。

c. 成果と課題

プログラム終了直後、参加者 2 名に事後アンケートを実施した。各項目に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の 4 段階で評価を行った。

ワークショップの成果について、参加者 2 名ともが「そう思う」と回答した項目は、「ワークショップは自身のキャリアにとって有意義な内容であった」、「ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながる」、「研修は全体的に満足できるものだった」、「ティーチング・ポートフォリオの作成を同僚にもすすめたい」である。また、「ティーチング・ポートフォリオがどのようなものか理解できた」、「個人的な教育活動について深く考えることができた」という項目でも 2 名ともが肯定的な回答であった。

運営面においては「メンターからの助言は役に立った」、「事務局は手際よく研修を運営した」、「ワークショップの目的は明確に設定されていた」、「ワークショップは分かりやすい順序ですすめられた」、「ワークショップ会場は快適な環境だった」の設問では、2 名ともが「そう思う」と回答した。

このことから、参加者にとってポートフォリオ作成による教育活動の振り返りが有意義なものであったことが伺える。また、ワークショップ形式で、メンターのサポートのもとでポートフォリオの作成を行うことが教育改善に有効であることが裏付けられた。

また、自由記述の設問 (d. アンケートの自由記述参照) から、ポートフォリオ作成の重要な目的である「振り返り」が行われ、自身の教育理念を深く考えることができていることが伺える。また、今回の参加者 2 名のうち、1 名は学外からの参加

者であった。本ワークショップの参加者は少ないが、学外の参加者に対しても満足度の高いプログラムを提供できることは重要なことである。ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップは拘束時間が長く申し込みに躊躇する教員が多いが、一方で参加者からの満足度は非常に高いプログラムである。このことから、少しずつ作成経験者が増え、ワークショップの利点が周知されることが、参加者を増やすための重要なポイントとなる。今後もしょずつ参加経験者を増加させるとともに、広報のさらなる工夫を行っていくことが重要であると考えられる。

d. アンケートの自由記述

最後に、ワークショップ終了直後に実施したアンケートの自由記述の回答を示す。

(1) ティーチング・ポートフォリオを作成したご感想をお聞かせください。

◆文章化し、可視化し、エビデンスを添付しようという作業は身体的にも精神的にもハードでした。研修を終えてからも、書きそびれたことを思い出したり、表現の不十分なところが見えてきたりしています。事前に貸与していただいた参考書より、センターの皆様がお書きになられたティーチング・ポートフォリオが参考になりました。

◆3 日間集中して作業する行為が楽しかった。教育理念の概念化が特に頭の整理につながった。自分が当初思っていたよりも自身に関する内容を深掘していったため、普段とは違った思考プロセスを体験することができました。

(2) ワークショップに参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

◆自分のこれまでの教育内容・方法を内省することができました。特に、理念について深く考察したことは今後の教育活動を行うにあたって大きな自信となることと思います。また、他の大学の先生方との交流ができたことも大きな刺激となりました。

◆普段、様々な作業を同時に実施しているので、集中して振り返る作業は、今後の方針などを考える機会につながった。

表 2 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

第 1 日 (2017 年 9 月 6 日・水曜日)

時 刻	内 容	備 考
11:30 - 12:00	受付 オリエンテーション	
12:00 - 12:30	・ はじめに (副学長よりあいさつ) ・ 自己紹介 (スタッフ・参加者) ・ ティーチング・ポートフォリオとは アイスブレイク 昼食	教室：講義室 1
12:30 - 13:30	・ 初校へ向けての共通アドバイス メンター、参加者との交流	教室：講義室 2
13:30 - 14:15	第 1 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	個人ミーティングの 部屋へ移動
14:15 - 17:00	TP 作成作業	教室：講義室 1
19:00 - 21:00	情報交換会 (任意参加)	

第 2 日 (2017 年 9 月 7 日・木曜日)

時 刻	内 容	備 考
9:00 - 10:00	TP 作成作業	教室：講義室 1
10:00 - 10:30	第 1 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	個人ミーティングの 部屋へ移動
11:00 - 12:00	TP 作成作業 意見交換 昼食	教室：講義室 1
12:00 - 13:00	・ 第 1 稿に共通するコメントと情報共有 ・ 第 2 稿をまとめるにあたって	教室：講義室 2
13:00 - 13:30	第 3 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	個人ミーティングの 部屋へ移動
14:00 - 17:00	TP 作成作業	教室：講義室 1

第 3 日 (2017 年 9 月 8 日・金曜日)

時 刻	内 容	備 考
9:00 - 10:00	TP 作成作業	教室：講義室 1
10:00 - 10:30	第 4 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	個人ミーティングの 部屋へ移動
11:00 - 12:00	TP 作成作業 意見交換 昼食	教室：講義室 1
12:00 - 13:00	・ 第 3 稿をまとめるにあたって ・ TP 披露の形式説明 ・ TP の活用方法 (ワーク)	教室：講義室 2
13:00 - 14:00	TP 作成作業 ・ プレゼンテーションの準備 (A4 版・一枚程度)	教室：講義室 1
14:00～	プレゼンテーション準備 TP 披露・修了式	教室：講義室 1
15:00 - 16:00	・ メンティーによるプレゼンテーション ・ FD 委員会委員長挨拶 ・ 修了証授与 ・ 記念写真 ・ ワークショップを振り返って	教室：講義室 1

(3) ワークショップをよりよいものとするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。
◆初日の開始時間をもう少し早めてはよいのでは…と感じました。私の都合のため、22 時までの原稿提出が難しく、結果として初日、2 日とも 18:30 までセンターで作業させていただきましたことをお礼申し上げます。

(吉田 博)

8. 大学教育カンファレンス in 徳島

a. 大学教育カンファレンス in 徳島の目的

徳島大学の全学 FD 推進プログラムの一環として実施している大学教育カンファレンスも今回で 13 回目となった。これまでの実践成果を基盤にして、本年度実施した FD 活動の成果を検証し、FD ネットワークを充実・発展させる機会となるよう、本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みを共有し、大学教育の質的向上に向けた成果を確認するために実施した。

b. 概要と成果

- ・会期：2018 年 1 月 5 日（金）9:00～18:00
- ・会場：徳島大学教養教育 4 号館等
- ・概要：全体の参加者は学外からの参加者 18 名を含む、154 名であった。発表件数は、口頭発表 14 件、ポスター発表 16 件、ワークショップが 3 件、自由参加型ディスカッションが 1 件行われた（表 3）。ワークショップ A では、教養教育院の北岡和義講師による「レゴブロックを用いたイノベーションとシステム思考の入門」、ワークショップ B では、総合教育センターの金西計英教授等による「MOOC を使って反転授業をやってみよう」、ワークショップ C では、四国学院大学の仙石桂子助教及び、国際センターの Gehrtz 三隅友子教授による「演劇的知とコミュニケーション—自らの教育活動を振り返る—」が行われた。

特別講演として、京都大学高等教育研究開発推進センターの山田剛史准教授による講演が「大学教育の質的転換と教学 IR の組織的展開」と題して行われた。すべての発表終了後に情報交換会を開催した。

c. カンファレンスの成果と今後の課題

昨年度のアンケート結果で、発表件数と参加者数は比例していることが判明し、今年度は発表件数を増やすために広報を積極的に行い、昨年度よりも発表件数が 10 件増え、参加者も 50 名ほど増加した。

参加者に行ったアンケート結果では、「カンファレンスは全体的に満足できるものだった」（図 4）、「今後もこのカンファレンスを継続していくべきだと思う」（図 5）について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が 85%以上に達している。今後もプログラム内容を見直し、参加者にとって有益に働くように工夫していきたい。

また、「カンファレンスで取り上げてほしい特別講演、ワークショップのテーマ、あるいは新しい企画」の自由記述として、カンファレンス自体を「アクティブ化」していくことへの提案があった。

アクティブ化していくことについて、ポスター発表で 1 分間プレゼンテーション（発表者全員がポスター発表に入る前に、発表内容の概要を 1 分で伝える）を行ったり、優秀ポスター賞を設ける等、来年度に向けて検討していきたい。

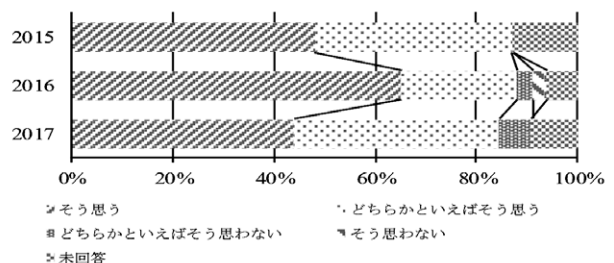


図 4 カンファレンスは全体的に満足できるものだった

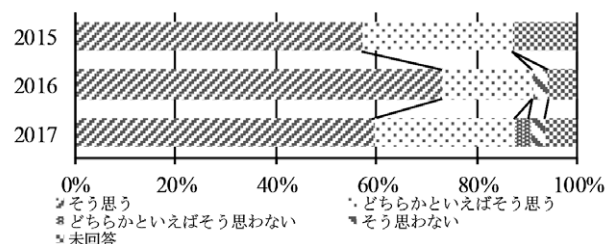


図 5 今後もこのカンファレンスを継続していくべきだと思う
(上岡麻衣子)

表 3 2017 年度 大学教育カンファレンス in 徳島プログラム
会期：2018 年 1 月 5 日 (金) 会場：徳島大学教養教育 4 号館等

8 : 30 ~ 9 : 00	受 付	<教養教育 4 号館 2 階ホール>	
9 : 00 ~ 9 : 15	学長挨拶 野地 澄晴	<教養教育 4 号館 202 講義室> 司会：赤池雅史	
9 : 15 ~ 10 : 15	A② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の経年比較	A① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■文理融合の問題解決型授業「総合科学実践プロジェクト」の 5 年間の取り組みの成果	口頭発表 A 座長：桑原 恵 <4 号館 202 講義室> 大学院社会産業理工学研究部 佐藤 征弥
			口頭発表 B 座長：長宗 秀明 <4 号館 203 講義室> B① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■BYOD 環境によるワーケーション型実習の試みとその課題
			情報センター 谷岡 広樹 他
10 : 15 ~ 10 : 25	A③ 9 : 55 ~ 10 : 15 ■企業見学会を通じたロールモデルの提示とその効果	A② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の経年比較	B② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■ティーチング・ポートフォリオの作成意義と普及に向けて 総合教育センター 吉田 博 他
			B③ 9 : 55 ~ 10 : 15 ■学生が企画する「レポートの書き方講座」の意義 理工学部応用化学システムコース 1 年 向井 将馬 他
			大学院社会産業理工学研究部 外輪 健一郎 他
10 : 25 ~ 11 : 55	◆レゴブロックを用いたイノベーションとシステム思考の入門	◆MOOC を使った授業をやってみよう	ワークショップ A <4 号館 202 講義室> 教養教育院 北岡 和義
			ワークショップ B <4 号館 302 講義室> 総合教育センター 金西 計英 他
			ワークショップ C <5 号館会議室> ◆演劇的知とコミュニケーション-自らの教育活動振り返る- 国際センター Gehrtz 三隅友子 他

11 : 55 ~ 13 : 00	休憩
13 : 00 ~ 14 : 00	ポスター発表 <開催場所：5 号館 2 階 学生自習スペース> ① ピア・エデュケーションを取り入れた中学生への喫煙防止教育の効果 大学院医歯薬学研究所 奥田 紀久子 他 ② フィンランド短期留学で看護専門科目を履修した看護大学生の学び 大学院医歯薬学研究所 板東 孝枝 他 ③ 東日本大震災被災地支援と連携した PBL 型大学院教育 大学院社会産業理工学研究部 佐藤 高則 他 ④ 情報技術の習得を目的としたプログラミング学習用教材の開発 技術支援部 辻 明典 他 ⑤ ロケットのロール制御の条件についての考察 工学部機械工学科 3 年 安福 隆亮 他 ⑥ 徳島大学ソーカールネットワークの走行用モータとしての特性試験 工学部機械工学科 3 年 濱田 健史 他 ⑦ 基礎物理学講義の FCI による評価 (2) 教養教育院 齊藤 隆仁 他 ⑧ Improving Group Discussion Interaction Scaffolding Communication Strategies in Small Group Discussion 教養教育院 カイザー メイガン レネー ⑨ 高大連携事業「高校生の大学研究室への体験入学型学習プログラム」実施報告 (第 8 報) 教養教育院 渡部 稔 他 ⑩ 学部生と大学院生のティーチングアシスタントチームによる高大院連携化 学実験出張講義 教養教育院 南川 慶二 他 ⑪ Thinking About Global Education at Japanese Universities (日本の大学におけるグローバル化教育の授業について考える) 教養教育院 ギュンター デイルク・クレーメン スクラップブック作成による学習の有効性 教養教育院非常勤講師 ギュンター 知枝 キャリア形成支援における学生の成長度測定に関する一考察 総合教育センター 島 一樹 ⑫ 簡易版アカデミック・ポートフォリオを活用した作成ワークショップの実践 阿南工業高等専門学校 松本 高志 他 ⑬ 正課科目におけるルーブリックを用いたコンピテンシー自己評価 阿南工業高等専門学校 川畑 成之 他 ⑭ 阿南高専における LMS 活用状況と展望 阿南工業高等専門学校 菊池 弥生 他
14 : 00 ~ 14 : 10	休憩

	口頭発表C 座長：吉本 勝彦 ＜4号館 202 講義室＞ C① 14：10～14：30 ■教養教育におけるシミュレーション・ラーニング(Situated learning)の実践 大学院社会産業理工学研究部 佐藤 高則 C② 14：30～14：50 ■歯科補綴学授業におけるアクティブラーニングの効果－反転授業と TBL の比較－ 大学院医歯薬学研究部 大倉 一夫 他 C③ 14：50～15：10 ■学生から見たアクティブラーニングの実施状況と満足度および自学自修時間との関係 大学院医歯薬学研究部 三笠 洋明 他 C④ 15：10～15：30 ■SIH 道場におけるラーニングスキル取得傾向について－学生アンケートにもとづく縦断的調査研究－ 総合教育センター 上田 勇仁 他	口頭発表D 座長：上田 哲史 ＜4号館 203 講義室＞ D① 14：10～14：30 ■界面張力測定装置の設計・製作プロジェクト 大学院社会産業理工学研究部 外輪 健一郎 他 D② 14：30～14：50 ■ゲームクリエイティブプロジェクトの活動を通じて得られたこと 工学部知能情報工学科 3 年 横山 翔太 他 D③ 14：50～15：10 ■AL 型大学院講義での発問「宇宙での生活に本物の自然体験は必要か？」の学習効果について 大学院先端技術科学教育部 2 年 松重 摩耶 他 D④ 15：10～15：30 ■持続可能な社会に関する国際大学間連携教育 教養教育院 大橋 真 他
14：10～ 15：30		
15：30～ 15：45	休憩	
15：45～ 18：00 (休憩含む)	特別講演 司会：川野卓二 ＜4号館 202 講義室＞ 演題：「大学教育の質的転換と教学 IR の組織的展開」 講師：山田 剛史 先生（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授） 自由参加型ディスカッション (テーマ：講演に対する質問や日常の教育活動を進めるうえで困っていること) 司会：吉田 博 ＜4号館 202 講義室＞ コメンテーター：山田 剛史 先生 他	
18：20～ 20：20	情報交換会 ＜徳島大学生協食堂 2 F 「Kirara」＞	

9. SIH 道場担当者 FD

本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学教育改革推進等補助金「大学教育再生加速プログラム (テーマ I: アクティブ・ラーニング)」において、2015 年度から開講している初年次教育プログラム「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の 2017 年度の実施に向けて FD を開催した。本 FD は、各学部・学科のコーディネーターと授業担当者が、SIH 道場の目的・目標を理解し、SIH 道場の実施に必要な教育手法についての理解を深める機会を提供するものである。コーディネーターと授業担当者は原則として年度ごとに入れ替わるため、毎年実施している。本節では、2017 年度 SIH 道場担当者 FD の実施概要を報告する。

a. ねらい

本 FD は、授業設計コーディネーター、SIH 道場授業担当者が SIH 道場の概要とともに、授業で用いる e ポートフォリオ、ルーブリックによる評価法、アクティブ・ラーニングの手法を学ぶ機会を提供することで、SIH 道場の円滑な実施・運営を支援するためのものである。本 FD の目標は次の 3 つである。

- ① 大学教育再生加速プログラムの概要、当該学科の SIH 道場の詳細について理解する。
- ② SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ③ OJT 型の FD として、授業実施から振り返りまでのプロセスを理解し、実践できるようになる。

b. 概要

■開催日・会場

常三島キャンパス (地域創生・国際交流会館共用室 301)

第 1 回: 3 月 2 日 (木) 17:00～18:40

第 2 回: 3 月 7 日 (火) 15:00～16:40

蔵本キャンパス (藤井節郎記念医科学センター 2 階多目的室 1・2 室)

第 1 回: 3 月 1 日 (水) 17:00～18:40

第 2 回: 3 月 6 日 (月) 15:00～16:40

本 FD の対象者は、2017 年度 SIH 道場の授業設計コーディネーター、授業担当者であり、計

4 回のうち出席可能な回に原則として参加することとした。事情によりどうしても参加できない場合については、参加者が到達する目標及び、実践する内容について、参加した場合と同等の条件を満たしていることを当該教員の所属する学科の授業設計コーディネーターが確認した上で「参加」とみなすこととした。なお、授業設計コーディネーターは、各学科における授業運営 (実施、振り返り、評価等) の責任者であるため、大学教育再生加速プログラム実施専門委員会が個別に対応することとした。

■参加者

今年度の参加者は、教員 92 名である。

■運営メンバー

運営メンバーは、総合教育センター教育改革推進部門長を含め、詳細は次の通りである。

氏 名	所 属	職 名
赤池雅史	教育改革推進部門	部門長
川野卓二	教育改革推進部門	教 授
宮田政徳	教育改革推進部門	准教授
吉田 博	教育改革推進部門	講 師
新原将義	教育改革推進部門	特任助教
金西計英	ICT 活用教育部門	教 授

■内容

各 4 回の実施日において、表 4 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目、教育改革推進部門及び、SIH 道場コンテンツ作成 WG の提供する教材について説明を行った。さらに、SIH 道場の改善に向けた評価として、学生及び、教員アンケートの実施やコーディネーターが行うプログラム設計評価シートによる振り返り等について説明を行った。また、2017 年度より教員の授業実施の支援のための取組として新たに導入した「院生コーディネーター」制度についても説明を行い、積極的な活用を呼び掛けた。

「e ポートフォリオシステム」では、学生及び、教員が授業で学んだ内容や授業実践について振り返りを行うための学生のツールである e

ポートフォリオの使用法について説明を行った。
「アクティブ・ラーニングと学びを促す評価」
では、アクティブ・ラーニングの定義や学修効果、
ルーブリックによる評価法について説明を行った。

SIH 道場は、アクティブ・ラーニングの全学的な普及のための入り口となる初年次教育プログラムである。そのため、担当者 FD においては、学部・学科・専攻・コースごとの SIH 道場プログラムの趣旨及び、学生、教員それぞれの到達目標、授業実施（早期体験・ラーニングスキルの修得・学修の振り返り）、終了後の教員の授業実践の振り返りまでの一連の流れを参加者が理解することが重要である。担当者 FD の直後に実施した「SIH 道場担当者 FD 受講者アンケート」の結果からは、SIH 道場の目的や到達目標、授業担当者が行うべき事柄、アクティブ・ラーニングやルーブリックに関する理解及び、FD・説明会の満足度を尋ねる設問について、4 件法で「とても当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した参加者が 8 割を超えていた。

一方で、「SIH 道場の教材（テキスト・ビデオ教材・ルーブリック）の使用方法が理解できた」の項目に対する肯定的な回答は 69.2%、「e ポートフォリオシステム（Mahara）の使用方法が理解できた」の項目に対する肯定的な回答は 65.4%と、いずれも他の項目に比べると低い満足度にとどまっている。この点について、自由記述への回答においては、「Mahara 等については実際に機材をさわりながらの方が理準が深まるを感じました」といった記述が見られた。

SIH 道場担当者 FD では説明すべき内容が多く、時間の制約もあるため、Mahara の操作を実際に体験する機会を設けることは困難であるが、こうした意見を参考に、その後、2017 年度内に授業設計コーディネーター及び院生コーディネーターを対象とし、Mahara の使用・操作方法を実際に体験しながら学ぶ説明会を実施した。こうした取り組みや、院生コーディネーターの活用について、より多くの教員に広げていくことが今後の課題である。

自由記述では他にも、「関連性のない個別のシステムが多すぎて、良くわかりません。どのレベルの学生を対象としているのかが良くわかりません」という、LMS の配備環境に対する現場教員の混乱を示唆する記述も見られた。大学教育改革の推進が叫ばれる一方で、特に本学のような大規模の大学では様々な取組が同時多発的に進行し、同じ機能をもった機器・サービスがそれぞれ別の取組のもとで導入されるという事態が生じている。各取組は実施・運営主体も異なり、越境は困難であるが、各取組の成果を共有し、資源として引き継いでいくためにも、取り組むべき課題であるといえよう。

(新原将義)

10. アクティブ・ラーニングを推進する FD

a. ねらい

アクティブ・ラーニングを推進するために、「スマートフォンを活用した授業改善ワークショップ」を開催した。本ワークショップは 2017 年度から実施した新しい企画である。本ワーク

表 4 2017 年度 SIH 道場担当者 FD プログラム CT 機器の導入

時間	内 容	詳 細 項 目	担当者
20分	SIH道場の概要	①目的・概要 ②スケジュール（設計→実施→振り返り）	新原将義
25分	eポートフォリオシステム	①システムの概要 ②学生の利用の仕方 ③教員の利用の仕方	金西計英 高橋暁子
55分	アクティブ・ラーニングと学びを促す評価	①アクティブ・ラーニングとは ②アクティブ・ラーニングの実践 ③学びを促す評価方法	川野卓二 吉田 博

を進めることを目的に、到達目標は次の通りであった。

- ① ICT 機器活用の事例について説明することができる
- ② 「授業改善」の視点からアンケート・理解度テストの必要性について説明することができる
- ③ Office365 の「Form」を使ってアンケート・小テストを開発できる

本ワークショップは、全学 FD として位置づけ徳島大学の教職員を対象に実施した。昨今の大学における ICT 機器の導入事例を紹介し、授業改善の中で学生アンケートや理解度テストの重要性について解説した。また、全学的に導入されている Office365 のアプリケーション「Form」を使って授業の中で実施する予定のアンケートや小テストを開発した。

b. 概要

■開催時期

2017 年 12 月 15 日 (金) 16:30~18:00

■会場

地域創生・国際交流会館共用室 301

■参加者

今年度の参加者は教職員 10 名であった。

氏 名	所 属	職 名
渡部 稔	教養教育院	教 授
中川 隆彦	教職教育センター	准教授
音井 威重	生物資源産業学部	教 授
斉藤 卓也	役 員	副学長
酒井 仁美	技術支援部	職 員
谷岡 広樹	情報センター	助 教
齊藤 隆仁	教養教育院	教 授
宮田 政徳	総合教育センター	准教授
吉田 博	総合教育センター	講 師
上岡麻衣子	総合教育センター	特任研究員

■運営

氏 名	所 属	職 名
上田 勇仁	総合教育センター	特任助教

■内容

本ワークショップでは次の内容を実施した。

- 1) 大学における ICT 機器の導入事例についての解説

- 2) 授業改善における学生アンケート・理解度テストの活用方法

- 3) Office365 のアプリケーション「Form」を使って授業の中で実施する予定のアンケートや小テストの開発 (図 6)

サンプルアンケート：現代社会論第3回

【アンケートの目的】現代社会論第3回の授業の最後に授業内容に対する感想を確認する。授業の中で紹介した「働き方改革」の新聞記事に関するアンケートを実施し、授業に参加している学生同士の考えを共有し理解を深める。

匿名で返信します。

* 必須

1. 氏名 *

回答を入力してください

2. あなたはプレミアムフライデーの制度についてどのように感じましたか? *

☐ とても賛成

☐ 賛成

☐ どちらともいえない

☐ 反対

☐ とても反対

3. その理由について答えて下さい。 また、こうした制度があればいいという建設的な意見があれば答えて下さい。 *

回答を入力してください

図 6 ワークショップで解説したアンケート

■成果と課題

本ワークショップのアンケート (図 7) から「研修は全体的に満足できるものだった」「今後の研修を継続していくべきだと思う」などの項目について参加者全員が肯定的な回答を示した。ワークショップの中でのディスカッションにおいても日頃、紙のアンケートやクイズを実施しているが回収や採点についての負担が多く、今回紹介したアプリケーションを直ぐに取り入れたいという要望が多かった。マイナビが行った調査によると 90%以上の大学生がスマートフォンを所有しており、今後もコミュニケーションツールの中心にスマートフォンが位置づけられると考えられる (マイナビほか 2017)。学生にとってもスマートフォンを使ったアンケートや小テストの実施についての抵抗感は少なくなり、スマートフォンを活用したワークショップの要望が増えていくと想定される。

自由記述においては、「もう少し時間を長くとする。研修をシリーズ化する」「実技の時間がもう

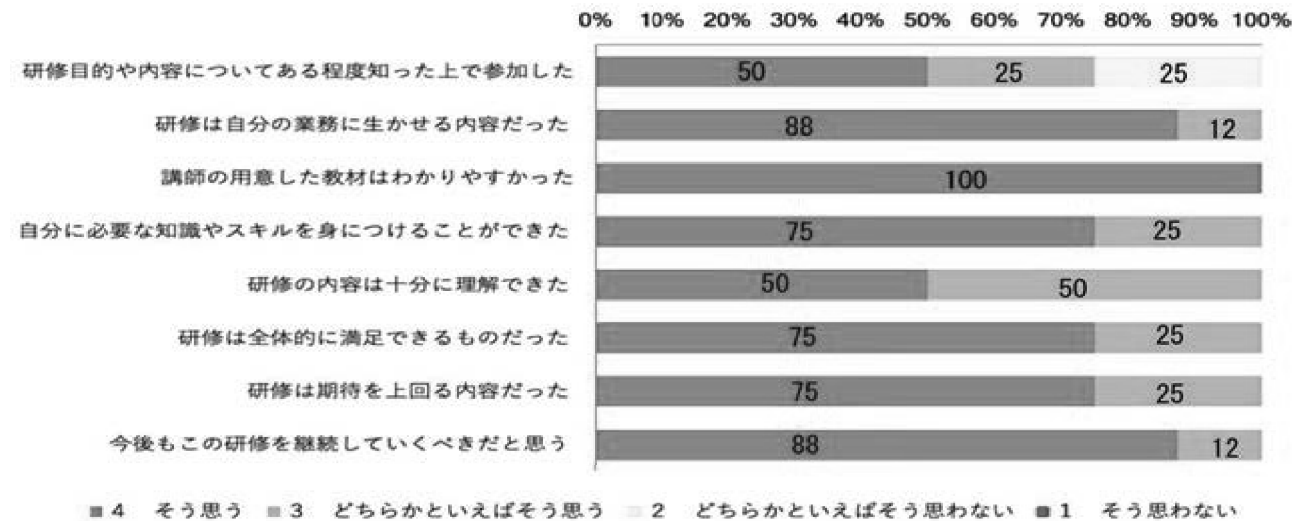


図 7 本ワークショップ終了後のアンケート (n=8)

少し長かったらよかったです。」などの要望があり、ワークショップ実施時間内にアンケートや小テストを全て完成させることができなかったことが考えられる。今後はワークの時間を一定時間確保する必要がある。また、本ワークショップを継続していくとともに、発展的な内容についても検討を進めていきたい。

参考文献

- 1) マイナビ, 法政大学キャリアデザイン学部 : 2017 年卒マイナビ大学生のライフスタイル調査, 参考 URL : https://www.mynavi.jp/news/2016/02/post_10835.html, 閲覧日 2017 年 12 月 22 日